

ご挨拶

本日は私共の演奏会にお越しいただきありがとうございます。演奏者一同、心より御礼申し上げます。昨年10月の第51回演奏会から約1年を経て、こうして再び演奏会当日を迎えることができました。厳しい状況のなか、皆で集まって音楽活動が続けることができる喜びをかみしめております。今回は、モーツァルトの描いた精緻で繊細な交響楽の極致と、色彩豊かで奥深いシュトラウスの“軽音楽”の世界を、変幻自在の阪さんの指揮とともにお送りいたします。ご堪能いただければ幸いです。まだまだ息詰まる日々の続く昨今ですが、今日このひとときだけでも肩の力を抜いて、どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。（団長 中川 航）

指揮：阪 哲朗 Tetsuro Ban



©Florian Hammerich

阪 哲朗は欧米での客演も数多く、おもにドイツ、オーストリア、スイス、フランス、イタリアなどで約40に及ぶオーケストラ、歌劇場に招かれ成功を収めている。日本においては、NHK交響楽団をはじめとする主要オーケストラ、新国立劇場、二期会などのオペラ団体を指揮している。

これまでに、ビール市立歌劇場（スイス・ベルン州）専属指揮者（1992～97年）、ブランデンブルグ歌劇場専属第一指揮者（1997～98年）、ベルリン・コーミッシェ・オーパー専属指揮者（1998～02年）、アイゼナハ歌劇場（ドイツ・テューリンゲン州）音楽総監督（2005～09年）、山形交響楽団首席客演指揮者（2007～09年）、レーゲンスブルク歌劇場（ドイツ・バイエルン州）音楽総監督（2009～17年）を歴任。現在、山形交響楽団常任指揮者、びわ湖ホール芸術参与。ベルリン・コーミッシェ・オーパーでは、H. クプファー新演出による「天国と地獄」、A. ホモキ演出による「ファルスタッフ」、M. シューラー新演出による「リゴレット」などを手がけ、約20 演目 170 回余を指揮し好評を得た。また、2008/09 年の年末年始に、ウィーン・フォルク

スオーパーで、同劇場の年間のハイライトとも言うべき公演である「こうもり」を指揮したことは大きな話題となった。地元ウェブ・サイト“オペラ・ウィーン”では『成功した大晦日』と題して、“阪哲朗によるオーケストラは、躍動感あふれる熱のこもった演奏をした。弦楽器には官能的に悦びにふける何かがあった”と絶賛された。

ほかに、シュトゥットガルト歌劇場、スイス・バーゼル歌劇場、新国立劇場などで、「ファルスタッフ」、「カルメン」、「ペレアスとメリザンド」、「ホフマン物語」、「カヴァレリア・ルスティカーナ」、「道化師」、「天国と地獄」など多くの作品を指揮。ドイツ国内はもとよりヨーロッパ各地の歌劇場における過去 25 年間に指揮した舞台作品数は約 70 演目、通算公演回数は1000 回以上にのぼる。

京都市出身。京都市立芸術大学作曲専修にて廣瀬量平氏らに師事。卒業後、ウィーン国立音楽大学指揮科にて K. エステルライヒャー、L. ハーガー、湯浅勇治の各氏に師事。

山形大学での公開講座や、定期的に東京藝術大学、国立音楽大学より特別招聘教授として招かれるなど、後進の指導にも力を注いでいる。

1995 年第 44 回ブザンソン国際指揮者コンクール優勝。1996 年京都府文化賞奨励賞、1997 年 ABC 国際音楽賞、2000 年京都市芸術新人賞、第 2 回ホテルオークラ音楽賞、2004 年第 12 回渡邊暁雄音楽基金音楽賞、2006 年第 26 回藤堂顕一郎音楽賞、2020 年京都府文化賞功労賞受賞。

プログラム・ノート

W. A. モーツァルト：交響曲第 41 番 ハ長調「ジュピター」

1788 年 8 月 10 日完成。7 月 25 日に第 40 番の交響曲を仕上げてからわずか 2 週間。6 月末に産み落とされた第 39 番を含めれば、約 2 か月のスパンで、音楽史上屈指の傑作が立て続けに書かれたことになる。おそらく演奏・出版のあてもなく 3 曲もの大交響曲を一気呵成に書き上げることはなかっただろう、というのが近年の見立てであるが、モーツァルトが実際にどのような契機でこの 3 曲に取り組んだかは、いまだはっきりとわかっていない。いくつかの補助線を引いてみることはできる。

記録が残っている。) けつきよくハイドンのようなロンドン行きは叶わず、結果としてモーツァルトは次の交響曲を書くことなく、1791 年に亡くなった。

いずれにせよ、『フィガロの結婚』(1786 年)、『ドン・ジョヴァンニ』(1787 年) という 2 つのオペラをウィーンとプラハで成功させ、宮廷作曲家という肩書きも得たモーツァルトが、意気揚々とさらなる飛躍をめざして書き上げた野心作であることは間違いない。あちこちに仕掛けられた創意の数々――モチーフどうしの見事なコントラスト、意表をつく転調や大胆な和声、音響効果が考え抜かれたオーケストレーション、そしてなんとといっても終楽章の巧みな対位法的処理――そのひとつひとつが、流麗な筆致で結び合わされ、生き生きと感情豊かに語りかけてくる。

ヨハン・シュトラウス 2 世：喜歌劇『こうもり』序曲 ポルカ「チク・タク」（『こうもり』の主題による）『こうもり』より「チャールダーシュ」（管弦楽版）

ウィンナ・オペレッタの傑作『こうもり』のハイライトがふんだんに詰め込まれた序曲を聴けば、ヨハン・シュトラウスが並々ならぬ作曲の才能をもっていたことがわかる。これから舞台上で起こる愉快な騒動を暗示する旋律を次から次へと聴かせつつ、得意のワルツをじっくり堪能させ、浮き足立つようなポルカで期待感を高め、コーダへとなだれ込む。

ポルカ「チク・タク」は、『こうもり』のなかでも軽快で聴き映えのする旋律を集めて快速なポルカにまとめたもの。なかでも印象的な冒頭の主題は、タイトルのとおり時を刻む音にちなむ。第 2 幕、舞踏会にやってきた小金持ちの主人公アイゼンシュタインは、仮面をつけハンガリーの伯爵夫人に扮した妻ロザリンデを、妻とは知らず口説きにかかる。高価な懐中時計を取り出し、彼女の手を自分の胸にあて、時計に合わせて鼓動を数えてもらおうとする（とんだセクハラ野郎である）。夫の策略を知っている彼女は、ことば巧みに時計を取り上げてしまう…。

一本取られたアイゼンシュタインに、ほんとうにハンガリーの伯爵夫人なのかと問われた妻が「それでは歌ってみせましょう」と応じてみせるのが「チャールダーシュ」。ロザリンデ役のいちばんの見せ場となるアリアであり、劇中ひとときわ異彩をはなつナンバーでもある。クラリネットによるジブシー風の導入に続き、独特の抑揚をもつ旋律が情感たつぷりに歌い上げられ（「故郷の響きは郷愁をさそい…」）、最後は速い踊りのテンポに乗せて陽気にまくし立てる（「燃え上がる人生の喜びが、生粋のハンガリー心を熱くする…」）。

ヨーゼフ・シュトラウス：ワルツ「ダイナミーデン」

ヨハン(2世)の2才年下の弟ヨーゼフ・シュトラウスは、一度は技師としてのキャリアを選びながらも、兄を助けるために、音楽の世界で生きていく決心をする。シューベルトやベルリオーズ、ワーグナーを好んだという彼の作品は、ワルツ「天体の音楽」をはじめ、優美な旋律やぬく

もりのある響きが魅力だ。

ワルツ「ダイナミーデン」は、ヨーゼフの作品のなかでもとりわけ艶っぽくロマンチックな雰囲気をもつ。独特の浮遊感を湛えたその旋律は、リヒャルト・シュトラウスのオペラ『ばらの騎士』第 2 幕でいけ好かないオックス男爵が「この歌を知ってるかい」とおもむろに歌い出す場面で借用されている。

ちなみに「ダイナミーデン」という言葉は当時、熱・光・電気・磁気といった物理エネルギーの総称として使われており、出版時のタイトル「見えざる引力」というフレーズに照らすと、電気（静電気）や磁気（磁石）によって生じる「引き合う力」のことが含意されているように思われる。1865 年 1 月 30 日にウィーンの工業舞踏会で初演された際には、「〈ダイナミーデン（エネルギー）・ワルツ〉という珍しいタイトルの新作も披露された。なるほど工業を担う経営者たちはエネルギー（蒸気）を使って働き――破産するわけだ」と皮肉まじりに報じられた。

ヨハン・シュトラウス 2 世 & ヨーゼフ・シュトラウス：ピッツィカート・ポルカ

曲名のとおり、弦楽器のピッツィカートのみで演奏されるお馴染みのポルカ。1869 年夏にロシアへ演奏旅行に来ていたヨハンとヨーゼフ兄弟が、当地で合作したとされる。はたしてどの部分が兄弟どちらのアイデアなのか、想像してみるのも楽しい。トリオではグロッケン（鉄琴）が愛らしく合いの手を添える。

ヨハン・シュトラウス 2 世：皇帝円舞曲

1871 年に（オーストリア抜きで）統一を果たした新生ドイツ帝国。その首都ベルリンで 1889 年 10 月に開館することとなった新しいコンサートホール「ケーニヒスバウ（王の建物)」。そのこけら落とし公演の演目として新作の委嘱を受けたヨハン・シュトラウス 2 世が、演奏会用に書き下ろしたのが「皇帝円舞曲」である。ウィーンからオーストリアの皇帝も臨席するとあって、このワルツは当初、独墺両国の親善にちなんで「手を取りあって Hand in Hand」というタイトルで演奏された。出版時に現在のタイトルとなったが、それは皇帝にあやかろうとした出版社の希望による。

美しく流れる耳なじみの良い旋律はもちろんのこと、楽曲構成やオーケストレーションにも随所で大胆な工夫が凝らされており、円熟の域に達したヨハン・シュトラウスの手腕が光る。行進曲ふうの序奏から、あたたかいホルンの響きとともにゆったりとしたワルツが導入されたのち、華やかで力強いワルツに切り替わる…。パレットの多彩さはシュトラウスのワルツ随一と言ってもよいだろう。

この曲にはブラームスも大きな感銘を受けたことが知られている。もともと二人は親交も深く、ブラームスはシュトラウスの汲めど尽きせぬ旋律の才を高く評価していた（羨んでいた）が、この曲の完成度の高さ、とくに和声の妙味には舌を巻いたようだ。